

法然上人のご法語 第二十一

精進

あるいは金谷きんこくの花を玩もてあそびて遅々

たる春の日を虚しく暮らし、あるい

は南楼なんろうに月をあざけりて漫々たる秋

の夜を徒らいたずに明かす。

あるいは千里の雲に馳せて山の

かせぎ

鹿を捕りて歳を送り、あるいは万里

いろくず

の波に浮かびて海の鱗を捕りて日

げんかん

しの

を重ね、あるいは嚴寒に氷を凌ぎて

せろ

世路を渡り、あるいは炎天に汗をの

ごいて利養を求め、あるいは妻子眷

おんない

属に纏われて恩愛の絆、切り難し。あ

しゅうてきおんるい

しんに

るいは執敵怨類に会いて瞋恚のほ

むら止むことなし。

そ^う 惣じてかくのごとくして、
ち^{ゆう}や 昼夜

ち^{よう}ぼ 朝暮、
ぎ^{よう}じゆうざ 行住坐臥、
が 時として止むこと

なし。ただほしきままに、飽くまで

三途八難の業を重^いぬ。

然れば或る文には、「一人一日の中
に八億四千の念あり。念々の中うちの所
作、皆是れ三途の業」と云えり。

かくのごとくして、昨日も徒らに
きのう

暮れぬ。今日もまた、虚しく明けぬ。

いま幾たびか暮らし、幾たびか明か

さんとする。

● 「金谷」

金谷園。中国晋の時代、豪華な遊
びが繰り広げられたと伝えられる場
所。

● 「南楼」

同じく晋代に建てられた望楼。

思へばこの世は常の住み家にあ
らず

草葉に置く白露、水に宿る月よ
りなほあやし

金谷に花を詠じ、榮花は先立つ
て無常の風に誘はるる

南楼の月を弄ぶ輩も 月に先立
つて有為の雲にかくれり

人間五十年、化天のうちを比ぶ

れば、夢幻の如くなり

一度生を享け、滅せぬもののあるべきか

これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ

（「敦盛」より）

● 「三途八難」 仏教に出会うこと

ができない境涯

* 地獄・餓鬼・畜生 (いずれも甚だ

しい苦痛のため)

* 長寿天 (長寿の神の世界。求道

の心が起こらない)

* 辺地 (辺境の地)

* 盲聾瘖症 (感覚の障害)

* 世智弁聡（世俗智だけにたけてい

る）

* 仏前仏後（釈迦仏誕生以前と、末

法以降の法滅の時代）